

【ねがいましては】

平成29年9月25日

KYOWA SCHOOL

第323号

「断勉」

灰谷健次郎さんの著作からヒントをいただくことが多くなりました。「灰谷健次郎の発言 I」（いのちの優しさ）の中の「断食」から、ふとつながる物を感じました。

医療としての断食療法というものがあり、そこには若者たちも多数参加しており、中にはなかなか言葉を発することができないところへ、やっとのことで口をきいたらお前でもものが言えるのかと友人にからかわれて、ふたたび言葉を失った女子高生がいたりしたけれど、治療中灰谷さんがあいさつをすると、ちゃんと返事をしてくれたり、同室の子と散歩を楽しんでいた内容が書かれていました。

断食療法の効果は、(1) 全ての臓器に休養を与え、自然治癒力を旺盛にする。(中略) (5) 断食後は何を食べても美味しく、悪食、偏食の矯正が楽にできて、正しい食生活に入ることができる。(6) 絶食の体験により、精神、肉体の苦難を克服したという自信が体得され、あらゆる場合にプラスとなる。

だそうです。

実は私がここに目をとめたのは、この「食事」というものを絶つ「断食」を「勉強」を絶つ「断勉」にしたらどうなるかという考えでした。

時折ですが、海外の貧しい経済状態に置かれる子どもたちが、貧しい環境の中でいきいきと勉強をする光景が映し出されたりします。ものがない状態の中で、子どもたちは取材に訪れた記者の質問に口を揃えてこたえます。「勉強が楽しい」と・・・教科書もなく、宿題もなく、テストもなく、学べるのは学校でだけ・・・。しかも給食もなく・・・。

でも子どもたちの反応は、学ぶことに飢えている・・・。

先ほどの断食効果3つを勉強に置き換えてみます。

(1) 勉強を絶つと全ての頭脳に休養を与え、自然治癒力を旺盛にする。(つまり学びたいという本能が復活する)

(5) 断勉後は何を学んでも楽しく、勉強嫌いの矯正が楽にできて、正しい学びに入ることができる。

(6) 断勉の体験により、精神的に自信が体得され、あらゆる場合にプラスとなる。

おそらく、貧しい教育現場に溢れる子どもたちが口々にする「勉強が楽しい」という発言は、今の日本の子どもたちであつたらいったい何パーセントが理解できるでしょうか。ほとんどに近い子どもたちは、「何言ってるの」ではないかと思えます。

無理矢理「これを食べなさい (覚えなさい)」「これを明日までに食べてきなさい (宿題)」「これを食べないと次からはもっとまずいものを食べさせるよ (成績下がったらもっと勉強させるよ)」といった教育制度が今の日本の教育なのだろうと感じてしまいました。

ほぼ脅迫に等しい内容で日々日本の子どもたちは歩かされているような気がいたします。

ある日高校生が一言、「今度のテストで赤点とると、夏休みに補習があるんです。学校へ行かなきゃ・・・。」

ある日中学生が一言、「課題提出しないと、内申に響くって言われたからやっているんです。」

ある日小学生が、「・・・」つまらなそうに、まるで食べたくもない食事をいやいや目の前にしているような表情で向かいます。言葉で表現することもできないくらいに生きようとする気力も失われています。

そのような表情をしたいからしているではありません。「食べ、食べ、食べ、・・・」と言われながら、こころの中は、体脂肪ならぬ「勉脂肪」で埋め尽くされています。その脂肪を取り除くべく子どもたちは取り組みます。

ゲーム・スマホ・・・。

それでも成績や評価を恐怖と感じながら、しかたなく向かう子どもたち・・・。

学ぶことの楽しさ、わかることの楽しさ、できたことの楽しさ、生きることってたのしいと感じてもらえるような環境が必要なはずです。

私の望みはそんな元気を失ってしまった子どもたちに「ニコッ」を取り戻すことです。不可能に近いことなのかもしれませんが、でも、こんな気持ちで日々戦っているつもりです。

人は弱いです。そう思いつつ、気がついてみれば流されそうになっている自分がいたりします。

さて、こんなんじゃダメだ、ぼくだって、わたしだって、このような世界から脱出したいと願っているのなら、もう皆仲間です。気持ちはひとつです。助け合う勉強、教えあう勉強、発見し合う勉強、教科書に縛られない勉強、自由な勉強、何これって言うくらい脱線した勉強・・・やってみましょうよ。

ひとが人らしく見える瞬間・・・人がひととしている瞬間・・・それは君自身がいきいきとしている瞬間です。

「あーん、もうわかんない・・・。」と、大きなグチがこぼれていいんじゃない。「やったぜ、9回目でやっと合った。」

ここへ来たときぐらい「勉脂肪」のことは忘れましょう。